

## 看護女子大学生の子宮頸がん予防行動に関する実態調査 第2報 -4年生の実態-

杉本海晴<sup>1)</sup>、監物万里香<sup>1)</sup>、塚本康子<sup>1)</sup>

1) 新潟医療福祉大学看護学科

【背景・目的】子宮頸がんは女性に最も身近ながんであり、2000年以降、罹患率・死亡率ともに20～30歳代に多く、特に20歳代で増加傾向にある<sup>1)</sup>ことから、予防啓発は極めて重要な課題となっている。感染予防としてワクチン接種が世界的に勧められており、2009年わが国でも予防ワクチンが認可された。2010年には公的助成が開始され接種率向上を図っていたが、接種後の副反応の報告により、2013年6月以降、積極的接種の呼びかけを中止している<sup>2)</sup>。また、予防には子宮頸がん検診を合わせて受ける必要があるが、検診受診率は2割程度と低い<sup>3)</sup>。

わが国の子宮頸がん予防対策が変化してきたなかで、女性たちはどのような予防行動をとってきたのだろうか。本研究では、これから看護職になろうとしている看護女子大学生が、子宮頸がんに対してどのような予防行動をとってきたのか、ワクチン接種と子宮頸がん検診受診の有無、その行動を左右した背景や要因、予防行動に対してどのように考えているのか明らかにすることを目的とした。

【方法】1)調査対象者・方法：看護女子大学生4年生を対象とした。先行研究を参考に研究者独自の調査票を作成し、対象者に配布、その場で回収した。調査は2016年7月に実施した。2)調査内容：調査票は、対象者の背景、子宮頸がん・予防ワクチン・子宮頸がん検診に関する知識、子宮頸がん予防ワクチンを知った経緯、子宮頸がん予防ワクチン接種の有無とその理由、子宮頸がん検診受診の有無とその理由、現在の子宮頸がん予防ワクチンへの思い、子宮頸がん検診への思いで構成した。3)分析方法：記述統計、単純集計及びクロス集計と検定をした。4)倫理的配慮：新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得て行い、対象者へは研究の目的及び倫理的配慮の内容を文書と口頭で説明し、同意書にて同意を得た。

【結果】4年生に配布71名、回収69名（回収率97.2%）。平均年齢は21.5歳。

予防ワクチン接種率は73.9%（図1）で、接種した年齢は15歳1名（2.0%）、16歳12名（23.5%）、17歳15名（29.4%）、18歳12名（23.5%）、19歳2名（3.9%）、20歳7名（13.7%）であった。

接種を決定したのは、52.8%が「母親」であり、45.3%が「自分」であった。30.4%が接種に迷いがあると答え、理由は、

「副反応が怖い」76.1%「時間がない」33.3%「知識不足」28.6%であった。接種済のうち96.1%が「受けて良かった」

と答え、未接種のうち61.1%が「受けなくて良かった」と答えた。子宮頸がん検診の受診率は17.4%で、ワクチン接種済の検診受診率は19.6%、未接種の検診受診率は11.1%であった。受診しない理由は、「機会がない」46.4%「面倒」37.5%であった。一方、64.9%が今後検診を受けようと思っていると答えた。子宮頸がん・子宮頸がんワクチン・子宮頸がん検診の知識を問うたが、ワクチン接種者の正答率及び検診受診者の正答率と、ワクチン未接種及び検診未受診者の正答率に有意差はなく、正答率は平均して43.3%という結果であった。

【考察】廣原らが報告した一般大学のワクチン接種率9.7%<sup>4)</sup>と比較し、看護女子大学生4年生の接種率は極めて高く、公的助成の対象ではない年齢時や大学に入学してから接種した学生も多かった。子宮頸がんやその予防行動に関する知識は十分でなかったこと、接種の決定は母親が半数以上していたことから、接種率が高いのは母親が関係しているものと思われた。一方、未接種の理由として、7割以上が副反応への恐れを挙げており問題視された副反応の症例が接種への意思決定に関係しているといえた。子宮頸がん検診の受診率は2割以下ではあったが、6割以上が今後受診を検討していると答えており、看護学生としての意識の高さがうかがえた。また、ワクチン未接種より接種済の検診受診率が高く、予防行動に対する意識が高いと思われた。

看護女子大生は、一般女子大生よりワクチン接種率は高かったが、知識は十分でないことから、早い年代から子宮頸がんや予防行動に関する正しい知識を提供することで、子宮頸がん予防行動への関心を高めていくことの必要性が示唆された。

【結論】1. 看護女子大学生4年生の子宮頸がん予防ワクチンの接種率は74%と極めて高かった。2. 子宮頸がん検診の受診率は17%であった。3. 子宮頸がんや予防行動に関する正答率は低かった。4. ワクチン接種に対する迷いの理由は、「副反応が怖い」「時間がない」「知識不足」であった。5. 子宮頸がん検診を受診しない理由は、「機会がない」「面倒」であった。

### 【文献】

- 1) 今野良：子宮頸がん予防HPVワクチンの副反応・有害事象，日産婦医会報，10，2013.
- 2) 児玉龍彦：Vol.8 病原微生物の除去でがんはなくなるのか(3)－利害関係の不透明なキャンペーンが不信感を生じた子宮頸がんワクチン問題，医学のあゆみ，Vol.252 No.13，1309-1313，2015.
- 3) 今野良：HPVワクチンとは－子宮頸がんの予防効果，思春期学 vol.28，127-134，2010.
- 4) 廣原紀恵，笠原夕莉：女子大学生の子宮頸がん・ヒトパピローマウイルス（HPV）に関する理解度と検診・ワクチン接種の実態について，インターナショナル nursing care research，13(4)，13-23，2014.

図1. ワクチン接種の有無

